中高文化講演会

気づき促し育む駿台魂

桐分校元教諭が講演 角谷さん

「学ぶことが生きる力養う」

駿台甲府中高PTA文化部会は8日、甲府・コラニー文化ホールで、長野・松本市立旭町中学校桐分校元教諭の角谷敏夫さんを講師に招いて文化講演会を開催。演題は『学びと感動が人を変える』―塀の中の中学校 桐分校」で、駿中・高生が熱心に耳を傾けた。

◇

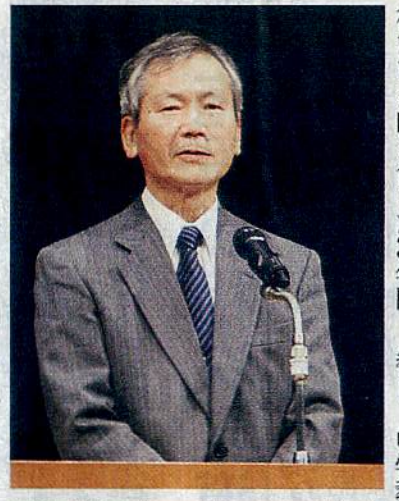
桐分校は、松本少年刑務所内にあり、義務教育未修了の受刑者が学ぶ日本で唯一の公立中学校で、その様子はドラマ化もされた。少年の受刑者が減った近年は、母国で義務教育に相当する教育を受けていない外国籍の人も増えているという。角谷さんは、法務教官として1973年から2008年に退職するまで、中学生であり受刑者である生徒たちと向き合った35年間を振り返った。

塀の中の中学校

桐分校ができたのは1955年。敗戦後の混乱も影響し、中学教育を受けられなかった受刑者が多かったことから、松本市議会の議決を経て開設された。就学期間は3学年の1年間。男子のみの1学級で、全国の刑務所から希望者を募り、選ばれた18歳から70歳近い一握りの受刑者が生徒だった。

入学当初、生徒のほとんどは読み書きができなかった。駅名が読めず、仕事場に通うにも虚勢を張って多めの電車賃を払い続けていた過去を持つ受刑者や、「死ぬまでに中学校を卒業したかった」と打ち明けた初老の受刑者もいたという。

角谷さんは、腰痛の持病などから退学を申し出た生徒を叱咤激励したエピソードを披露。3日後からその生徒は一日三つの漢字を覚えようと連日、3本の指に一文字ずつ書いては時間を見つけて懸命に覚えていたという。



実直な語り口で塀の中の中学校での体験を語った角谷敏夫さん

角谷さんの話に聞き入る駿台甲府中高生＝いずれも甲府・コラニー文化ホール

すさんだ心を癒やし、生徒たちの「生きる力」の糧になるよう、たくさんの感動を味わってほしいと、常に生徒たちと向き合ってきた角谷さんは「感動は、謙虚さや素直な気持ちになった時に感じるものです」とも。10月の遠足は、4月の入学から築いてきた信頼だけを武器に手錠も腰縄も付けず出掛けたが、生徒たちは「感動は裏切りません」と応えたという。

最初は鉛筆を持つ手が震えた生徒たちは、読み書きを覚え、人生を変えた。無期刑だった生徒が仮釈放になったり、文学賞を取ったりした生徒もいた。

「一つ学べば一つ世界が広くなる」。角谷さんは、生徒が残した言葉を紹介。「教育とは希望をかなえることであり、学ぶことは生きる力を養うことです。未来には可能性があります。力の限り学び、心の根を伸ばしてください」と呼び掛けた。

懸命な姿勢に感動

質疑応答では、友人関係に悩む生徒に対し、角谷さんは「集団の中では流されがち。確かな自分を確立していってほしい」とアドバイスした。また、ドラマ化されたDVDで事前学習した後、角谷さんの講演を聴いたという小林伊織さん（駿中3年）は「桐分校を『最後の希望』とし、懸命に頑張る受刑者を見て感動しました。今、私たちが当たり前のように授業を受けられることに感謝しなければいけないと思いました」と感想を述べた。

佐藤桂子さん（駿高3年）は「角谷さんは桐分校の生徒を『日本一勉強する中学生』と評していましたが、生徒たちの学習意欲や懸命に学習する姿は、恵まれた環境にある私たちも見習うべきところ。相手を思う気持ちなど、教育目標や学級運営の方法は人間関係にも重なり、学ぶことが多いと感じました」。小山真由さん（駿高3年）は「犯罪は許されることではありませんが、教育を通し人は変われると思いました。ネットやメールは便利でも、理解し合うのには最後は人対人。顔を合わせるなど直接的なコミュニケーションが重要だと思いました」と話していた。

〈企画・制作〉山梨日日新聞社広告局